

日本細菌学会 関東支部ニュース

第37号

第84回日本細菌学会関東支部総会のご案内

前回の支部ニュースでお知らせいたしましたような主旨により、下記のスケジュールで第84回日本細菌学会関東支部総会を開きたいと思っております。多くの方々の積極的な参加をお願いいたします。

- I. 会期：平成13年11月26日(月)、27日(火)
- II. 会場：神奈川県民ホール
(会議室、小ホール)
〒231-0023 横浜市中区山下町3-1
(JR京浜東北線石川町又は関内駅より徒歩15分)
Tel：045-633-3727

III. プログラム：

1. 特別講演
(26日13:00~14:00)
「赤痢菌の粘膜上皮感染機構」
笹川千尋教授
(東京大学、医科学研究所)
(27日13:00~14:00)
「DNAワクチンと感染防御(仮題)」
Britta Wahren教授
(スウェーデン、カロリンスカ研究所)
2. シンポジウム
(26日14:00~16:00)
「細菌の病原因子のコントロール」
座長 野田公俊教授、山本友子教授
(千葉大学)
(27日10:00~12:00)
「飼料添加(成長促進)抗生物質と耐性菌」
座長 太田美智男教授(名古屋大学)
(27日14:00~16:00)
「DNAワクチンをめぐる話題」

横浜市立大学医学部細菌学教室 奥田 研爾



座長 小出幸夫教授(浜松医科大学)、
奥田研爾教授(横浜市立大学)

3. 一般演題(26、27日)
- IV. 一般演題、総会参加、予稿集、懇親会申し込み
1. 演題申し込み方法：演題申込書(近刊の日本細菌学雑誌に掲載)に所定の事項をご記入の上、抄録(下記参照)とともに所属機関・研究室ごとにまとめて郵送でお申し込みください。
2. 抄録：A4版1枚に演題名、出題者氏名(演者に○印)、所属機関名、内容(目的、方法、結果、考察)をワープロを用いて印字して下さい。(書式は第83回等の当学会抄録を参考にして下さい)
3. 懇親会については11月26日夜を予定しております。
4. 参加申し込み：支部総会参加、予稿集、懇親会参加申込書(近刊の日本細菌学雑誌に掲載)に所定のことをご記入の上、郵送あるいはFaxでお申し込み下さい。
5. 申込先：
〒236-0004 横浜市金沢区福浦3-9

横浜市立大学医学部細菌学教室
第84回日本細菌学会関東支部総会事務局

Tel: 045-787-2602, Fax: 045-787-2509
E-mail: kokuda@med.yokohama-cu.ac.jp

6. 演題申込書及び抄録締め切り：平成13年8月20日（月）必着

7. 発表：口演のみにします。時間10分、
討論3分の予定

V. 費用：支部総会参加費3,000円、予稿集1,000円（当日1,500円）、懇親会参加費2,000円（当日2,500円）

学生会員は参加費、懇親会費が半額です。
参加等申し込み者に振込用紙をお送りいたします。

国立国際医療センター研究所紹介

国立国際医療センター研究所感染・熱帯病研究部 切替 照雄

国際医療センターはどこにあるのですか？
いったい何をしているところですか？といったことを本当によく質問されます。どちらの質問もなかなか一言ではお答えできずいつも口ごもってしまいます。

まず、はじめの質問ですが、外国の方には、「シンジュク、トウキョウ」と、日本の方には、「最寄の駅は、東西線早稲田、JR山手線新大久保、最近できた大江戸線若松河田です。」とお答えしております。それでも納得しない方に「東京女子医大の近くで、感染研の隣です。」と言うと納得していただけます。最後の手段として、「新宿駅でタクシーに乗っていただければお越しいただけます。」とお答えするようにしております。ご想像いただけたと思いますが、当センターは新宿区のちょっと不便な場所にひっそり建っております。感染研など幾つかの国立研究所や福祉センターなどが隣接する静かなところですよ。

2つめの質問のお答えになるかどうかかわりませんが、センターの成り立ちと組織を簡単に紹介いたします。当センターの前身は、明治4年発足の軍医療附属病院、後の東京第一陸軍病院です。陸軍医学校も併設されており、森鷗外はその校長を務めております。戦後は厚生省に移管され、長く国立東京第一病院として機能し、平成5年10月には国立国際医療センターが第4番目の国立高度専門医療センター（ナショナルセンター）として発足しました。ちなみに、他のナショナルセンターとして、がん、循環器、精神神経、生育、長寿があります。初代総長は高久史磨先生、次

いで鴨下重彦先生、現在は3代目の矢崎義雄先生が総長を務められております。研究所は、センター発足と同時に設立され、所長は、平成6年より竹田美文先生、平成11年より吉倉廣先生、平成13年4月より笹月健彦先生が務められております。このような優れたリーダーをもち得たことが当センターにとって非常に幸運であったと思います。センターの組織は、病院、国際医療協力局、研究所、国立看護大学校とこれらの組織を支える運営部からなっております。平成17年には国立厚生大学院大学校（仮称）の設置も考えられております。

センター設立の経緯や国際医療協力局が国際医療協力を推進していることから、研究所の当初の看板は国際医療協力研究でした。これには感染症など国際協力に必要なあらゆる医療分野に関する研究が含まれていました。また、センター全体としても国際的感染症対策の拠点施設としての役割を担っており、研究所としてもエイズ、結核、下痢感染症、マラリアに関する研究を各部門で行なっております。しかし、現在ではこれに加えて、21世紀の医療改革のモデルセンターとの位置付けから、病院といかに連携した研究を行なっていくのが研究所の最大のテーマになっております。具体的には、糖尿病などの代謝疾患、呼吸器、血液疾患、腎臓、肝臓、消化器疾患など日常重要な疾患に関する基礎研究を行なっております。

研究所は平成12年になってようやく全体の組織が完成したばかりです。現在14研究部からなっております。研究所としての風格はまだまだのような気がしますが、若々しさにあ

ふれ、多様性に富んだ研究環境がそろってきたように思えます。私自身も、国際医療協力と院内感染対策に参加しながら見えてきた感染症の諸問題、特に多剤耐性結核やMRSA等を研究の中心に据えようと悪戦苦闘する毎日です。センター内には、森鷗外が使用した机と鷗外がドイツから持ち帰った顕微鏡が飾られています。写真は、その前で研究部の仲間たちと撮ったものです。お気軽にお立ち寄りください。



フォーラム

今回のフォーラムでは「ゲノム研究の現状とこれから」をテーマとして、総論および各論（黄色ブドウ球菌、*Clostridium perfringens*、O157:H7腸管出血性大腸菌、*Helicobacter pylori*）について、専門の先生方に執筆を依頼しました（編集委員会）。

「ゲノム研究の現状とこれから」

細菌ゲノム解析の現状

東京理科大学基礎工学部 村上康文
塩基配列決定技術の進歩により、細菌ゲノムの解析は飛躍的な速度で実施されており、既に全ゲノム配列が決定済みのものは45種以上となっている。米国のゲノム解析5ヵ年計画で、当初解析の対象に選ばれていたのは大腸菌と枯草菌の二つであるが、実際には、インフルエンザ菌の全ゲノム構造が、The Institute for Genome Researchによりそれに先駆けて行われた（1, 2, 3）。大腸菌ゲノム・枯草菌ゲノムの解析は、環状染色体を最初に数万塩基対に断片化してクローニングし染色体上にマップする作業をまず行い、ついで個々の数万塩基対のクローンをショットガン法で塩基配列を決定するという、従来型のショットガン法によって配列決定が行われた。この方法では最初に物理地図の作成を行わねばならないが、マッピングの作業はややもすると塩基配列決定作業と同程度の労力が必要となることもある。一方、細菌ゲノムにおいては反復配列が少ないため、このような中間のマッピングの過程を省略して、いきなりゲノムDNAを小断片化し、プラスミドベクターまたはM13ベクターにクローニング

することにより、配列決定をめざす全ゲノムショットガン法（Whole Genome Shotgun法）による省力化が試みられた。1995年当時、米国のNIHを辞めたCraig Venter博士によって設立されたThe Institute for Genome Research（TIGRと略称）の研究チームによりこの手法はインフルエンザ菌を対象に試みられ、世界で最初に全ゲノム配列が決定されるに至った。この手法が可能となったのは、細菌においては反復配列が少ないために塩基配列データを結合することが高等動物ゲノムよりもはるかに容易であったこととコンピュータの処理能力が飛躍的に向上したためである。最近では、国内外を問わず、細菌のゲノム解析はほとんどの場合全ゲノムショットガン法で実施されおり、飛躍的な勢いで全ゲノムが配列決定されている。

参考文献として大腸菌と枯草菌のゲノム解析の報文をあげておいたが、細菌ゲノム解析の現状を把握するための最も良い方法は、米国エネルギー省の資金により開発された細菌ゲノム解析の網羅的データベースを閲覧することである。アドレスをあげておくが(4)、このデータベースを見ていただければ、現在までに配列決定されている細菌ゲノムの全体像を容易に把握できる

であろう。このホームページを参照すればわかるように、これまでに決定された細菌は、病原性微生物と極限的な環境で生育するものが多い。病原性微生物のゲノム解析は抗生物質を含む抗菌剤の開発のための重要なリソースとなりうるし、好熱性細菌のゲノム解析研究は工業的な応用への道を開くものであろう。

筆者は、出芽酵母ゲノム解析研究とその後の新規遺伝子の機能解析研究を行ってきたが、出芽酵母同様に、今後の重要な課題は新規遺伝子の機能解析研究であることは言うまでもない。特に複数の細菌ゲノムの遺伝子構成を比較してみると想像以上に、細菌ゲノムは多様であることが明らかとなる。このようなゲノムの多様性の解析は今後細菌の進化の系統樹を大きく書き換えていく可能性もあり目の離せない分野であろう。

- (1) Blattner, F. *et al.*: Science, 277, 1453-1462 (1997)
- (2) Kunst, F *et al.*: Nature 390, 249-256 (1997)
- (3) 小笠原直毅: 蛋白質核酸酵素増刊号ゲノムサイエンス, 2882-2886 (1997)
- (4) The Comprehensive Microbial Resource という名称のデータベースが細菌ゲノム解析を網羅的に集積している。アドレスは <http://www.tigr.org/tigr-scripts/CMR2/CMRHomePage.spl> である。また、<ftp://ncbi.nlm.nih.gov/genbank/genomes/Bacteria/> も参考にされたい。

黄色ブドウ球菌ゲノム研究の現状とこれから

順天堂大学医学部細菌学 平松啓一

黄色ブドウ球菌は、1879年に英国の外科医 Sir Alexander Ogston (1844-1929) が、Aberdeenの自宅の裏庭に立てた私設研究室で、青年の足のけがから採取した膿を顕微鏡で観察した際に発見した、ブドウの房のように連なった球菌である。医学の分野から見たこの菌の特徴は、すべての抗生物質に耐性化するflexibilityと、皮膚化膿症から、心内膜炎、骨髄炎にいたる多彩な感染症をおこすことである。とくに、この菌が、superantigenをつくり、毒素ショック症候群などの全身炎症性疾患をおこすだけでなく、人体のどの組織にも感染巣を作り得る

versatilityを有することは他の病原菌では見られない特徴である。その一方、黄色ブドウ球菌は、健康人の30-50%が鼻前庭に常在菌として存在するという事を考えると、この菌の環境適応へのflexibility、感染起因性に関するversatilityがどのような遺伝学的素因に基づいて発現してくるのかを全ゲノム塩基配列を解析することにより明らかにすることが必要であった。我々は、通産省、文部省のチームと共同で、約1年かかって2株の黄色ブドウ球菌のゲノムを解析し終えた。その結果は4月にLancetのarticleとして出版される。

用いた黄色ブドウ球菌株は、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌 (VRSA) 株 Mu50 と pre-MRSA株 N315で、いずれも日本に蔓延する clonotype-IIA に属する MRSA 株であり、両者の塩基配列の違いは Mu50 に挿入した mobile genetic element を除けば 0.08% 以下であった。このゲノム解析の結果、薬剤耐性遺伝子は、plasmid, transposon, conjugative transposon, および staphylococcus cassette chromosome (SCCmec) に局在すること、すなわち外来の遺伝子の頻繁な導入によりもたらされていることが確認された。一方、病原性発現のメカニズムに関しては、TSST-1 island, enterotoxin island, exotoxin island の 3 種の pathogenicity island family を見出した。とくにこれらのうち後 2 者には、tandem gene duplication による多くの toxin gene paralogues が見出され、そのいずれもが superantigen 活性をもつことが想定された。これらの superantigen repertoire は菌株ごとに異なる set を創りだしている可能性が高く、もしそうであれば、黄色ブドウ球菌総体としての superantigen repertoire は無限であるといって過言でない。おそらく、そのレベルは、ヒトの MHC class II antigen, T cell receptor Vbeta の diversity に匹敵すると思われる。このことは、黄色ブドウ球菌の感染成立においては、ヒトの免疫を escape することが主題でなく、むしろヒトの免疫系を刺激し、積極的に炎症を惹起することが黄色ブドウ球菌の主要な survival strategy であり、この superantigen が、黄色ブドウ球菌が事実上どのような遺伝的 background を持ったヒト

にも病原性を発揮することを担保するものであろう。このことと関連して、新たな病原性決定因子の候補として、我々は70の新規open reading frameを見出した。それらは、exoenzyme, exotoxin, adhesin, などであり、いずれも、黄色ブドウ球菌の多様な感染症発症のメカニズムを明らかにするための研究への端緒となろう。さらに、これら新たな病原因子は、新規ゲノム創薬、vaccineの開発へのtargetとしても注目に値する。

我々の現在の研究は、Mu50とN315の比較ゲノム解析からバンコマイシン耐性、高度メチシリン耐性のgenetic mechanismを明らかにする方向に進んでいる。また、我々の競争相手であった米国のTigr社、Oklahoma University、英国のSanger Centerでは、引き続き他の2株のMRSA、2株のMSSAのゲノム塩基配列の決定を行っており、そのうちその全塩基配列が公表されるであろう。その時点では、MSSAとの比較ゲノム研究により、メチシリン耐性を獲得しやすいMSSAのゲノムの特徴を明らかにする研究が重要となろう。

ゲノム研究の現状とこれから

—*Clostridium perfringens*

筑波大学・基礎医学系・微生物 清水 徹
グラム陽性嫌気性桿菌、ウェルシュ菌 (*Clostridium perfringens*) は多数の毒素や酵素を産生し、それらの協調的作用によりヒトにガス壊疽などを引き起こすと考えられている。これまでに、本菌の産生する代表的な毒素の遺伝子はクローン化されているが、既知の遺伝子以外にも本菌の病原性に関与する遺伝子が存在する可能性が高いと思われる。ウェルシュ菌ゲノムの全塩基配列を決定することは、本菌の病原性の全貌を解明するために有効であることから、ウェルシュ菌、strain13の全ゲノム解析を約2年前から開始した。平成11年4月より、本格的にテンプレート調製・配列決定を開始し、最終的に3,031,430bpの環状染色体と54,310bpのプラスミドの塩基配列が得られた。両DNA配列のA+T含量は28.6%と著明に低く、コドン使用頻度にも大きな偏りが観察された。プラスミドpCP13上には、ウェルシュ菌の病原因

子の一つとして最近同定されたbeta2毒素遺伝子や、連鎖球菌のcollagen adhesin遺伝子と相同性を持つ遺伝子などが存在し、pCP13が本菌の病原性に関与する可能性が考えられた。ウェルシュ菌染色体の全体像も明らかとなり、絶対嫌気性菌である特徴として、TCAサイクルの全酵素群が欠失し、呼吸鎖を構成するチトクロム酵素群も存在しないことが明らかとなった。エネルギー産生系として嫌気発酵を行う酵素が多数存在し、酢酸、乳酸、酪酸などを最終産物とする発酵経路を完全に組むことができ、その過程でガス壊疽に特徴的な水素ガスと炭酸ガスを産生する機構も明らかとなった。また、ウェルシュ菌のゲノムに存在する代謝系遺伝子を調べてみると、糖の利用に関する遺伝子、特に多糖やオリゴ糖を分解する酵素をコードする遺伝子が多数存在し、嫌氣的エネルギー産生における糖質の重要性を示唆するものと思われた。一方、アミノ酸合成系をみると、多数の合成系遺伝子が欠損しており、外界から必須アミノ酸として取り入れる必要があることが判明した。糖やアミノ酸の取り込みに関しては、特異的な輸送系タンパクが豊富に存在し、外界から栄養素を積極的に取り込む機構が存在することも明らかとなった。病原性遺伝子としては、alpha-, kappa-, theta-毒素などの遺伝子の他に、これまでに未知であった毒素遺伝子が多数存在することが明らかとなった。例えば、他の菌の溶血毒素と類似性の高い遺伝子が5個見られ、未知の腸管毒素と思われる遺伝子も複数個存在した。ヒアルロニダーゼをコードするnagH遺伝子については、ホモログが5個存在し、シアリダーゼをコードするnanH遺伝子についても、分子量の異なる2種が存在することが明らかとなった。タンパク分解酵素としては、システインプロテアーゼであるクロストリパインをコードする遺伝子も新規に発見され、ウェルシュ菌の病原因子として極めて重要な働きをするものと考えられた。最も興味深いのは、これらの毒素・酵素群がウェルシュ菌の増殖にも密接に関与していることであり、毒素・酵素の働きで宿主の細胞・タンパク・糖などを破壊・分解することにより増殖に必要な栄養素を獲得するという宿主と病原体の関係が明らかとなったように思われる。

ウェルシュ菌ゲノムを解析することにより、これまで未知であった病原遺伝子が同定されるとともに、代謝系の遺伝子群も明らかとなり、本菌の病原性解析に新たな展開を加えるものと期待される。今後は、DNAチップを用いた環境応答による病原性発現機構の網羅的解析、プロテオーム解析を用いた遺伝子産物の同定、各病原因子の活性・作用機構の解析などを通じて本菌の病原性をより明確にするとともに、他の菌のゲノム情報を活用した新たな感染症予防・治療法の開発などにも精力的に取り組んでいきたい。

ゲノム研究の現状とこれから—O157EHEC 国立国際医療センター研究所

(現大阪府立大学大学院農学生命科学研究科)

山崎伸二

病原細菌のゲノム構造が次々と決められて行く中、腸管出血性大腸菌 (EHEC: enterohaemorrhagic *Escherichia coli*) の全ゲノム構造が米国のF.R.Blattner博士を中心とした研究グループ(1)と宮崎医科大学の林哲也博士を中心とした研究グループ(2)の精力的な研究によって、それぞれ独自に決定された。Blattner博士らは、1982年ミシガン州での食中毒事件の時に分離されたO157EDL933株を用いて、林博士らは、1996年堺での集団食中毒事件の時に分離されたO157Sakai株を用いて解析した。それらの結果によると、O157の全長は約5.5Mbで、既に決定されている大腸菌K-12と比べて約0.8Kb大きいことが明らかとなった。O157とK-12に共通な領域が4.1Mb存在し、O157に特異的な領域が1.4Mb存在した。この特異領域がO157の持つ様々な病原性に関与していると考えられたが、1.4Mbという大きさは、ライム病の原因となる*Borrelia burgdorferi*のゲノムサイズ (1.44Mb) に匹敵する大きさであり、O157の病原発現機構の分子レベルでの解明は、予想以上に複雑なものであることが窺える。また、このO157の特異領域は全体の約25%に相当し、大腸菌の定義をもう一度考えさせる結果となった。共通領域の4.1Mbが51.1%であるのに対して、O157に特異的な1.4MbのGC含量は48.5

%と共通領域と比べて低いことから、O157の特異領域は大腸菌以外の外来性の遺伝子が水平伝達によって挿入されたものと考えられた。事実、この1.4Mbの50%以上は、プロファージあるいはプロファージ様構造からなるものであり、上記の推測を裏付けるものである。一方、K-12に特異的な領域が0.53Mb存在した。このことは、この特異領域が何らかの機能特異性 (例えば人以外での病原性など) を有している可能性を示唆するものである。これらのことから、共通領域の4.1Mbは大腸菌の基本骨格と考えられ、この領域に大小さまざまなDNA断片が挿入され、O157やK-12が形成されている。一般に病原因子は、Pathogenicity Islandと呼ばれる一群の大きな遺伝子断片上にコードされていると考えられていたが、ゲノム解析の結果から、結構小さな遺伝子断片上にも病原性に関与する遺伝子が存在していたことから、病原性は挿入遺伝子断片の大きさに関係ないことが明らかとなった。

O157に特異的な遺伝子は、O157に特異的なrRNAやtRNAあるいは病原性、代謝・輸送系、生体防御回避系に関与する蛋白質等をコードしていた。病原因子として、以前から知られている志賀毒素を代表とする毒素群に加えて、マクロファージ毒素やClpB様シャペロン、RTX毒素様蛋白やType IIIの分泌系やサルモネラと赤痢のinv-spa宿主・細胞侵入遺伝子と類似した分泌蛋白などが見つかった。特に興味深い点として、11個のlom/rck/pagC様遺伝子、2個の銅/亜鉛スーパーオキシドディスムターゼや2個のカタラーゼ遺伝子が見つかったことである。これらは、宿主の生体防御機構、特にファゴソーム中での菌の生き残りに重要な遺伝子群と考えられる。さらに、血清に対して耐性を示すと考えられる2個のbor遺伝子やtraT遺伝子も見つかった。

このように、今回のゲノム解析からO157の病原性には、志賀毒素やEHECヘモリシンを中心とした毒素だけでなく、様々な機構を介して病原性を発揮している可能性が示された。今後、O157だけでなくnon-O157も含めEHEC感染症の大流行や重症化に関与した菌株のゲノム構造を解析することによって、EHEC

の病原性の全体像が明らかにされるだけでなく、大流行や重症化に関与している遺伝子の同定も期待される。さらに、赤痢菌やサルモネラも含めて現在5種類に分類されている下痢原性大腸菌の違いもゲノムレベルで明らかにされる日もそう遠くないものと期待する。

1) N.T.Pema *et al.*: Genome sequence of enterohaemorrhagic *Escherichia coli* O157:H7. *Nature*, 409: 529-533, 2001.

2) T.Hayashi *et al.*: Complete genome sequence of enterohemorrhagic *Escherichia coli* O157:H7 and genomic comparison with a laboratory strain K-12. *DNA Res.*, 8: 11-22, 2001.

ゲノム研究の現状とこれから

- *Helicobacter pylori*

杏林大学医学部感染症学 神谷 茂

*H.pylori*の遺伝子構造は既に2菌株について解明されている。1997年米国The Institute of Genomic Research (TIGR)のTombら(1)により英国の胃炎患者由来株(26695株、*cagA*-positive, *vacA*-positive)、続いて1999年米国Astra Research CenterのAlmら(2)により米国の十二指腸潰瘍患者由来株(J99株、*cagA*-positive, *vacA*-positive)の全遺伝子構造が明らかにされた(それぞれ、<http://www.tigr.org/tdb/CMR/ghp/htmls/SplashPage.html>および<http://scriabin.astrazeneca-boston.com/hpylori/>のホームページアドレスにて検索可能)。

*H.pylori*のゲノムサイズは1.6Mb程度であり、(G+C)含有比39%、1,500個程度のORFをもつ。このうち機能が推定されているORFは890個前後であり、*H.pylori*特異的なORFは350個前後存在する。両菌株のゲノム構造を比較した場合、J99株の89個のORFはJ99株特異的であり、26695株の117個のORFは26695株特異的である。しかし、ゲノムの90%を占める1,406個のORFは両菌株に共通して検出されており、本菌のゲノム構造は極めて類似していることが示された。

*cagA*下流領域モチーフにより*H.pylori*はType I-Vの5型に分けられる(3)。南欧、南

米、アフリカ、北米での分離株は90%以上がType I、東アジアでの分離株の95%以上がType IIであったし、北欧での分離株のType I、II、IIIの比率はそれぞれ12、42、17%であった。Type IV、Vは稀にしか存在しない。*H.pylori*のヒトへの感染はヒトの進化過程の最近の時代(数万年前)に起こったものと推定されている。ペルー原住民より分離された菌株がアジア型ではなく、スペイン由来株に類似していることが明らかにされ、アメリカ大陸原住民(Amerindians)への*H.pylori*の感染は約500年前ヨーロッパからの新大陸征服者によりもたらされたことも推測されている。

現在までに遺伝子構造が明らかにされた*H.pylori*株は互いに類似した欧米由来の*H.pylori*であり、今後アジア由来株の遺伝子構造の解明がおこなわれることが期待される(残念ながら、大学・企業研究所を含めわが国で分離された菌株の遺伝子構造解明のためのプロジェクトは今のところないと思われる)。また、“非病原性”であると想定されている*cagA*-negative株を用いた遺伝子解析は本菌の病原性を解明する際重要であると考えられるし、他種*Helicobacter*との遺伝子構造の比較はヒトの胃粘膜に棲みつづける*H.pylori*の特異性を明らかにすることとなろう。いずれにせよ、複数菌株の遺伝子構造の解析結果により、今後、*H.pylori*の生物学の詳細が解明され、本菌感染を抑制する新しくかつ有効な治療戦略が展開されることが期待される(4)。

参考文献

1. Tomb J-F *et al.*: The complete genome sequence of the gastric pathogen *Helicobacter pylori*. *Nature* 388: 539-547, 1997
2. Alm RA *et al.*: Genomic-sequence comparison of two unrelated isolates of the human gastric pathogen *Helicobacter pylori*. *Nature* 397: 176-180, 1999
3. Kersulyte D *et al.*: Differences in genotypes of *Helicobacter pylori* from different human populations. *J. Bacteriol.* 182: 3210-3218, 2000
4. 神谷 茂: *Helicobacter pylori*の遺伝子構造と病原性 日細誌, 55: 629-648, 2000

集 会 案 内

- 1) 名 称 : 第7回日本ヘリコバクター学会
- 2) 会 期 : 平成13年6月21日(木)～22日(金)
- 3) 場 所 : 神奈川県立県民ホール(横浜市中区山下町3-1)
- 4) 世話人 : 三輪剛、東海大学消化器内科
- 5) 問い合わせ先 : 第7回日本ヘリコバクター学会事務局
高木敦司 Tel : 0463-93-1121、Fax : 0463-91-4175
e-mail : takagia@is.icc.u-tokai.ac.jp

- 1) 名 称 : 内毒素・LPS研究会
- 2) 会 期 : 平成13年6月23日(土) 13:00-17:20(17:30より懇親会)
- 3) 場 所 : 北里研究所本館大会議室(東京都港区白金5-9-1)
- 4) 世話人、問い合わせ先 : 四宮博人、愛媛大学医学部細菌学講座
Tel : 089-960-5274, e-mail hiroto@m.ehime-u.ac.jp
- 5) 事務局、松浦基博(自治医科大学微生物学講座) Tel : 0285-58-7332
- 6) 研究会ホームページ : <http://www.niah.affrc.go.jp/endo/lps/lps9th.html>

- 1) 名 称 : 第10回Lancefieldレンサ球菌研究会
- 2) 会 期 : 平成13年6月30日(土)～7月1日(日)
- 3) 場 所 : 旅館せいらん(岐阜市長良河畔)
- 4) 世話人 : 江崎孝行、岐阜大学医学部微生物学講座
- 5) 問い合わせ先 : 事務局
河村好章 Tel : 058-267-2240、Fax : 058-267-0156
e-mail : saikin21@cc.gifu-u.ac.jp

- 1) 名 称 : 第8回マクロライド新作用研究会
- 2) 会 期 : 平成13年7月13日(金)、14日(土)
- 3) 場 所 : 銀座東武ホテル(東京都中央区銀座6-14-10、TEL : 03-3546-0111)
- 4) 当番世話人 : 洲崎春海 昭和大学医学部 耳鼻咽喉科 教授
- 5) 問い合わせ先 : 事務局 日本医科大学 第4内科 吾妻安良太、臼杵二郎
Tel : 03-3822-2131 (6482) Fax : 03-5685-2084
- 6) 研究会ホームページ : なし

- 1) 名 称 : 第48回毒素シンポジウム
- 2) 会 期 : 平成13年7月25日(水)～27日(木)
- 3) 場 所 : 千葉大学けやき会館(千葉市稲毛区弥生町1-33)
- 4) 世話人 : 野田公俊、千葉大学医学部微生物学第二講座
- 5) 問い合わせ先 : 第48回毒素シンポジウム事務局
三宅真実 Tel : 043-226-2047、Fax : 043-226-2049
e-mail : mami@med.m.chiba-u.ac.jp

- 1) 名 称：第30回薬剤耐性菌シンポジウム
- 2) 会 期：平成13年8月24日（金）～25日（土）
- 3) 場 所：「御車会館」〒602-0841 京都市上京区河原町通今出川二筋下ル東入ル
Tel：075-211-5626 FAX：075-255-5334
- 4) 世話人：西野武志（京都薬科大学微生物学教室）
- 5) 問い合わせ先：事務局 群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設
Tel：027-220-8085、Fax：027-220-8088
e-mail：okubot@med.gunma-u.ac.jp

- 1) 名 称：第38回補体シンポジウム（第12回日本生体防御学会との合同学術集会）
- 2) 会 期：平成13年8月24日（金）～25日（土）
- 3) 場 所：京大会館（京都市左京区吉田河原町15-9）
- 4) 集会長：藤田禎三（福島県立医科大学医学部 生化学第二講座）
- 5) 問い合わせ先：補体研究会事務局 松下 操
Tel：024-548-2111 Fax：024-548-6760
e-mail：keisato@fmu.ac.jp（事務担当／佐藤慶子）

- 1) 名 称：第46回ブドウ球菌研究会
- 2) 会 期：平成13年9月6日（木）、7日（金）
- 3) 場 所：長井記念ホール（徳島大学蔵本キャンパス内）
- 4) 世話人：徳島大学歯学部口腔細菌 三宅洋一郎
- 5) 問い合わせ先：事務局徳島大学歯学部口腔細菌学講座 篠原直美
Tel：088-633-7330 Fax：088-633-7390
e-mail：sinohara@dent.tokushima-u.ac.jp

- 1) 名 称：第15回微生物シンポジウム
- 2) 会 期：平成13年9月13日（木）～14日（金）
- 3) 場 所：北里大学薬学部1号館大講堂（港区白金5-9-1）
- 4) 世話人：実行委員長 田中晴雄（北里大学薬学部微生物薬品製造学教室）
- 5) 問い合わせ先：事務局
Tel：03-5791-6241 Fax：03-3444-6197
e-mail：microb15@pharm.kitasato-u.ac.jp

海外会員便り

杏林大学医学部感染症学教室 山口博之

ドシャ降りの成田空港を不安で張ち切れそうになりながら単身でアメリカへ飛び立ってから早いもので8ヶ月が経過した。Florida タンパでの生活には慣れたが今だ英語は上達せずそして残念ながら研究も軌道にのっているとは言えない。南フロリダ大学 (USF) はタンパのやや北に位置し、周りは新興住宅地といったところだろうか。自然も色濃くのこっていてUSFに隣接する(車で10分ほど) レクスパークでは天然のアメリカアリゲーターを見ることができる。Floridaは非常に温暖なイメージがあるが大陸の寒気団の影響をもろに受け1月には氷点下近くにまで気温がさがるときもある。そうはいっても真夏の日射しは殺人的で日中の外出は車をのぞいて不可能に近い。大学の敷地面積はとにかく広大である。主要なビルディングはシャトルバスによって結ばれている。僕の留学先であるUSF医学部Medical Microbiology and ImmunologyのDepartmentは大学の西に位置する大きな建物の4階のフロアにおさまっている。窓から見える景色はなかなかのもので約300マイル遠方に位置するケープカナベルより打ち上げられるスペースシャトルディスカバリーを朝日をバックに見ることができる。

Departmentの朝は早い。一番乗りはCathyで5:30には実験を始めている。彼女の日課は実験室の窓から見えるプロバスケットボールも行なわれるサンドームの銀屋根の向こうに昇る朝日を見ることである。この朝日がなかなか情熱的すばらしい。Departmentは9つの研究室より構成されている。研究テーマは研究室ごとに異なっている。それぞれの研究室は教授1人に2-5人ほどのポスドクまたは技術員より構成されている。DepartmentのChairはDr. FriedmanでかつてNatureにも論文を載せたことのある感染免疫の分野ではかなりの有名人である。アメリカは日本と違い研究費はいっさい大学から支給されない。そのためChairの重要な仕事は研究費獲得を目的とした合法的な外交交渉にある。各研究室の教授の仕事は部屋の舵取りもさることながら研究費獲得のためのプ

ロポーザル作製に日々の時間が忙殺されている。Departmentの年間予算総額は日本円で1億円を優に越える。Vise Chairを勤めるDr.Klineが9つの研究室のまとめ役として実務を担当している。彼も研究室を持っていて“マリファナ誘導体の免疫細胞上にあるCB1およびCB2レセプターを介したシグナルトランスダクション”についての研究を行っている。Cathyは日本でいう講師の1人であり彼女の研究テーマは“レジオネラ感染症におけるマリファナ誘導体の免疫に及ぼす影響”である。僕が配属されている研究室のボスは山本容正先生でなにを隠そう日本人である。スタッフは僕を含め4人の日本人ポスドク[松永氏(和歌山県立医大)、原永氏(琉球大)そして池島氏(聖マリ)]と1人のアメリカ人(Alton氏)である。山本研究室のテーマは“細菌感染症におけるヒト免疫細胞のimmunomodulation”である。現在、クラミジアとレジオネラのin vitroの感染実験モデルを用いて免疫応答の解析を行っている。僕が現在行っている研究は“クラミジアのヒトリンパ球への感染モデルの確立とそれに伴う免疫応答の解析”である。クラミジアの培養一つとってもこれがなかなかどうして一筋縄ではいかない難敵である。論文の量産体勢に入ってる同僚の日本人ポスドクを横目で見ながら自分自身に“焦るな焦るな”と言い聞かせる我慢の日々が続いているが世紀の大統領選挙をこの目で見たことやKey Westのヘミングウェイ行きつけ



(左から2番目が筆者)

の飲屋さんで生ビールを飲めた喜びに比べたらそんなことはどうでもいいことなのかもしれない。とは言っても負けたくない!

6月中旬から妻と娘を日本より呼び寄せ家族3人での約1年間の生活が始まる。娘はパパのお友達のミッキーマウスに会えるのを楽しみにしているし妻は世界一大きなディズニーワールドに行ける喜びとアウトレットショップで格安のブランド品を買いあされる日々を夢のようなアメリカ生活と勘違いしているようである。

家族3人でまた生活ができるという計り知れない喜びが沸き上がる反面、ここアメリカではたして家族3人路頭に迷わず本当に生活ができるのだろうかという不安が日増しに膨らんでいるのも事実である。さてこの先どうなるのであろうか。一年後の自分がいったいどうなっているのか今から楽しみである(USF医学部 Department of Med. Micro. Immunol. ホームページアドレス:<http://hsc.usf.edu/MEDMICRO/Students.htm>)。

Beyond the Laboratory

近頃想うこと

日本医科大学 微生物学免疫学教室 大 国 寿 士

20世紀は戦争に明け暮れた激動の時代であったと同時に、また善きにつけ悪きにつけ、科学が驚異的に発展した世紀でもありました。今世紀前半は相対性理論や量子力学の発展を基盤として、核エネルギーが人類にもたらされました。その使い方の如何によっては人類を破滅に導き、その利用法はひとえに人間の英知に関わっています。一方、20世紀後半にはDNAの二重らせん構造の解明を出発点として、今日の分子生物学の隆盛がもたらされ、遺伝子研究が花開きました。

医療の世界においても医療機器の高度な発達により、病気の診断そのものは従来に比し、著しく進歩してきましたが、病因論に立脚した治療法や病因そのものに関してもなお多くの疾患が不明のまま残されています。そのような中で、遺伝子技術のめざましい発展を背景にして、原因不明の多くの疾患を遺伝子レベルで理解していくための努力がなされ、いわゆる遺伝子診断の研究と共に、さらには遺伝子治療の研究も盛んになって来ました。遺伝病とは別に、癌や多くの生活習慣病の発症に関与する遺伝子の研究が行われていますが、一つの疾患に多因子の遺伝子が関与するだけに、その変異した遺伝子とその疾患の成立に如何に機能しているかを明らかにしなければ、真の意味での病因の解明と治療法の確立には繋がりません。ポストゲノムにおける大きな課題のように思えます。しかし、多くの生活習慣病はまた、例え遺伝子異常が存在しても、環境因子に配慮す

ることにより、かなりの部分で、その発症が予防でき得ることも確かでありましょう。疫学研究がよく指摘するように、これまでに癌の基礎的、臨床的研究に日本ばかりでなく世界中が膨大な研究費を注ぎ込んで来ましたが、今だに癌の確実な治療法は出来ないでいます。しかし、タバコを止めることにより、肺癌患者は大幅に減少しました。これは特に疫学研究を基盤として、癌の予防が可能であることを示唆しており、この研究に要した研究費は先きの研究費に比べれば、はるかに少ない額であったでしょう。遺伝子研究も、もとより必要であります、同時に予防医学の研究に、一段と目をむけておく必要がありましょう。遺伝子が明らかになれば、遺伝子治療が可能であり、患者個人個人のオーダーメイドの治療が可能であるとの考えが喧伝されていますが、この解決にはまだまだかなりの時間を必要とします。見守って行きたいと思っています。また、遺伝子診断や遺伝子治療は、医療機器類の高度な発達による延命効果の問題と共に、ヒトの生命倫理や生命観をも揺さぶる問題として、絶えず議論して行かねばならないでしょう。最近ではナノテクノロジーの研究も開始され、原子や電子の人為的操作を介しての治療や診断への医学的応用が検討されはじめており、意外と早い時期にナノテクノロジーを利用した診断法や治療法が発展してくる可能性があるかも知れません。21世紀は医学の研究があらゆる面でエキサイティングであることを祈らざるをえません。

ロンドンの蚊

第一製薬 創薬第一研究所 大谷 剛

数年前のことであるが、ロンドン大学のカレッジのひとつでマラリアのage immunityに関する研究に携わる機会があった。所属していた学部には図書館がなく、大英博物館の西側に点在するいくつかの図書館に通った。規模もたまたまいも気に入って、LSHTM（ロンドン大学衛生および熱帯医学校）の図書館をよく利用した。ここは熱帯医学の祖であるマンソン卿ゆかりの建物で、図書館には卿が活躍した19世紀末当時のまま、ビクトリア調の重厚な調度品がしつらえてあった。明かり取りの大きな窓が吹き抜けの2階まで続く一面に向かってオークの机が並び、三方は天井までの書架、その2階部分は壁一面に書架を備えた回廊が巡っていて、その背後は薄暗い書庫であった。その回廊の木製の手摺の中ほどに帯状に続く装飾のレリーフは、何かへんてこなもので、目を凝らしてみると、それは大きな「蚊」であった。

マンソン卿の弟子であるロスが、蚊を中心としたマラリア原虫の生活環を解明したのは1897年のことで、ロスはこの功績で1902年にノーベル賞を授与されている。この頃はビクトリア朝大英帝国の、そしてLSHTMの全盛期でもあったといえる。世紀末のヨーロッパでは、アールヌーボーの芸術運動が盛んで、小動物や昆虫が家具や宝飾品などの装飾のモチーフとされたことは、代表的な作家のガレやギマールの作品で馴染みのあるところである。図書館の装飾に蚊のレリーフを用いることも、当時はあまり違和感なく受け入れられたのかもしれない。

後日、WHOの発行した脳性マラリアに関する冊子が必要になり、王立熱帯病学会の事務所を訪ねた折のこと。感じの良い婦人が応対してくれて、冊子を手に入れた後、閑散としてはいるが、とてもよく整理された事務所

のなかを何気なく見回すと、その場にそぐわないガラスケースが壁に掛かっている。何がそぐわないかというと、ショウケースのように中にネクタイが3本ほど掛かっているのである。気にかかった様子を察知してか、先程の婦人がこれは学会で販売しているの、記念にお持ちになられたらという。水玉のネクタイかと思ったが、これもよく見ると水玉と思ったものは蚊であった。ポリエステルのものでシルクがあって、シルクの方はたしか30ポンドということだった。その時はすっかりイギリス流のケチ精神が身についていたので、そんな高価なものはいただけませんと断ったが、今になってみると話のネタに買っておけばよかったと後悔している。後で気が付いたが、この王立熱帯病学会のマークも蚊をあしらったものであった。

マラリアばかりでなく、デング熱や黄熱など蚊によって媒介される疾患は多く、熱帯病と蚊の縁は深い。マラリア撲滅を阻害する大きな理由は蚊の駆除の困難性にあり、蚊の殺虫剤耐性化の問題もよく知られているところである。19世紀末の英国では、熱帯に広大な植民地を有しており、熱帯病の予防は切実な問題であったと考えられる。マラリア原虫などの病原体そのものよりも、媒介者である蚊がシンボルとしてしばしば登場することは、マラリアの生活環の解明という当時のトピックスを受けて、予防という観点での媒介システムの重要性がいかに強く認識されていたかを物語るものと思われる。

第83回日本細菌学会関東支部総会報告

国立感染症研究所 細菌部 渡辺 治雄



平成12年11月20日(月)、21日(火)の2日間、国立感染症研究所および国立国際医療センターを会場として、第83回日本細菌学会関東支部総会を無事に終了させることができました。研究成果を発表して下さった方々および学会に参加して下さった方々に感謝いたします。

今回は、関東支部総会を年1回にしての最初の会であるということで、その成果が気になるころでしたが、参加者総数212名、一般発表演題総数60題ということで、まずまずであったように思われます。演題が少なかった場合にとシンポジウムを考えておりましたが、それも企画しないで済み、一般演題を中心に、しかも2会場を用いて会を進めることができました。各会場では、活発なる討議が行われ時間が超過するような場面もあったようです。また、今回の総会では、寄付、広告を取らず、支部からの協力金と参加費だけで賄うことを試みました(感染研は厚生省の管

轄機関で、特に最近外部からの寄付等の取り扱いが厳しいということもありましたが)。経費節約のため、垂れ幕等をやめ、会場は施設内の会議室を用い、一般演題発表は全てOHPを使用することにしました。最終的には赤字を出さずにすませることができました(50円の黒字)。そのことにより、発表者に不便をおかけしたのではと心配ですが、幸い私にはそのことに対してのお小言が聞こえてきておりませんので、よかったのかなと自己満足しております。

お金をかけないで、活発なる総会をどの様に行うか。今回の学会の評価をふまえて皆様に議論していただくたき台にしていだければ幸いです。最後に、学会の準備に時間を割いていただいた細菌部部員及び関係者に感謝いたします。

平成12～15年 第2回 日本細菌学会関東支部
評議員会 議事録

日 時：平成12年9月27日15時

場 所：東京女子医科大学中央校舎4F

出席者：安部茂、伊藤輝代、今西健一、

内山竹彦（支部長）、奥田研爾、

加藤哲男、神谷茂、小出幸夫、笹原武志、

松井英則、山田澄夫、加藤秀人（幹事）

欠席者：小原康治、辨野義己、山口恵三、

渡辺治雄

1 支部長推薦の評議員の承認

大谷剛（第一製薬株式会社 創業第一研究所）、切替照雄（国立国際医療センター研究所感染・熱帯病研究部）、池康嘉（群馬大学医学部 微生物学教室）、大野尚仁（東京薬科大学 第一微生物学教室）、清水徹（筑波大学医学専門学群 微生物学教室）、平井義一（自治医科大学 微生物学教室）、戸邊亨（東大医科研 感染免疫部門 細菌感染分野）の7名の関東支部会員が支部長推薦の評議員として承認された。

2 小委員会委員長の決定

合同学会委員長は山口恵三、編集委員長は神谷茂、将来計画委員長は小出幸夫、学術集会委員長は山田澄夫の各評議員が承認された。

3 評議員会予定の検討

平成12年から平成15年までの新評議員会の予定が話し合われた。

平成9～12年 第10回 日本細菌学会関東支部
評議員会（現・次期合同）議事録

日 時：平成12年9月27日15時30分

場 所：東京女子医科大学中央校舎4F

出席者：

現評議員：安部茂（兼次期評議員）、

今西健一（兼次期評議員）、

内山竹彦（現・次期支部長）、

奥田研爾（兼次期評議員）、

加藤哲男（兼次期評議員）、川原一芳、

笹原武志（兼次期評議員）、佐竹幸子、

田中重則、宿前利郎、

山田澄夫（兼次期評議員）、

寺嶋淳（渡辺治雄 現・兼次期評議員代理）、

加藤秀人（現・次期幹事）

次期評議員：伊藤輝代、神谷茂、小出幸夫、

松井英則

欠席者：

現評議員：梅本俊夫、大國寿士、

小原康治（兼次期評議員）、笹川千尋、

益田昭吾、松浦基博、丸山務、森田耕司、

平松啓一、山口恵三（兼次期評議員）、

渡辺治雄（兼次期評議員）

次期評議員：辨野義己

報告事項

(1) 第83回関東支部総会準備状況

渡辺治雄総会長代理寺嶋先生より報告がなされた。関東支部会務総は11月20日(月)～21日(火)の2日。特別講演1、教育講演1、ワークショップ4あるいは5題の予定。

(2) 第84回関東支部総会準備状況報告

奥田研爾総会長より、総会は平成13年11月26～27日の2日間、神奈川県民ホールにて開催の予定との報告があった。

(3) 編集委員会報：川原委員長より、第36号支部ニュースの編集について報告があった。また、第36号に特別号の内容を組み込んだので、新期評議員会による特別号の発行は不要であるとの説明がなされた。

(4) 学術集会委員会報告：宿前委員長より、第85回関東支部総会長の候補者選びを行った旨の報告があった。

(5) 合同学会委員会報告：大國委員長より、3学会合同学会についてはもう少し状況をみてその意義を評価したほうがいいとの電話による報告があった。

(6) 将来計画委員会報告：平松委員長より、これまで行われてきた3学合同学会については、その評価の時期に来ており、より広く関連学会との交流の検討が必要との文書での報告があった。

審議事項（次期評議員はオブザーバー）

(1) 第85回関東支部総会長選挙

宿前委員長より、総会長候補者の選定経過について説明があり、評議員により6名

の候補者の推薦があったとの報告があった。評議員会では出席評議員によりこの6名について無記名投票が行われ、東大医科学研究所 細菌研究部 笹川千尋教授が選出された。(評議員会後に支部長による電話連絡にて笹川先生から支部総会長を引き受ける旨の意志表示があった)

(2) 評議員会引継

出席の現・次期評議員による諸委員会の引き継ぎについては、引き継ぎ事項を文書で支部長に報告することとなった。なお、新評議員会の各委員長は、学術委員長、小出幸夫；合同学会委員長、山口恵三；学術集会委員長、山田澄夫、編集委員長、神谷茂の各評議員。

(3) 関東支部会務総会議題

11月20日1時から開催される関東支部会務総会の議題について討議された。

平成12年 日本細菌学会関東支部総会会務総会議事録

日時：平成12年11月20日13時～13時30分
場所：国立感染症研究所共用第一会議室
議長：渡辺治雄第83回関東支部総会長

報告事項

- 1 逝去会員金子勉氏への黙祷がなされた。
- 2 会務報告：内山支部長より総会員数（平成12年10月1日～13年9月30日）は正会員1,409名、学生会員60名であることが報告された。
- 3 次期関東支部評議員と支部長の紹介：内山支部長より報告があった。
- 4 合同学会委員会報告：大國委員長より3学会合同学会についてはもう少し状況を見て評価するほうがよいとの報告があった。
- 5 編集委員会報告：川原委員長より、支部ニュース第35号と第36号の発行について報告があった。
- 6 将来計画委員会報告：内山支部長より、3学会の合同学会にとらわれず、広く関連学会との交流が必要という旨の平松委員長の紙面による報告が紹介された。
- 7 学術集会委員会報告：山田澄夫委員（宿

前委員長代理）より、担当した第83回～85回の日本細菌学会関東支部総会長の選出について説明がなされた。

- 8 第83回関東支部総会進行状況：渡辺総会長より報告された。
- 9 第84回関東支部総会準備状況：奥田研爾総会長より、総会は平成13年11月26日～27日の2日間、神奈川県民ホールにて開催の予定との報告があった。
- 10 今期関東支部長の任期終了の挨拶：内山支部長より関東支部長の任期終了の挨拶があり、続いて次期評議員会において支部長に再度選出されたとの報告があった。

審議事項

- 1 平成12年度会計決算：内山支部長より会計決算が報告された。続いて小原・安部会計監査担当委員より会計に不備が無いことが報告され、承認された。
- 2 平成13年度予算案：内山支部長より予算案が説明され、承認された。
- 3 第85回支部総会長の承認：内山支部長より評議員会において笹川千尋教授（東大医科研細菌）が第85回関東支部総会長（平成14年度）に選出されたことが報告され、承認された。

平成13年～15年 第3回 関東支部評議員会議事録

日時：平成13年1月25日10時～12時
場所：東京女子医科大学中央校舎1F会議室
出席：安部茂、今西健一、奥田研爾、大谷剛、大野尚仁、小原康治、加藤哲男、神谷茂、切替照雄、小出幸夫、笹原武志、辨野義己、平井義一、松井英則、渡辺治雄、内山竹彦（支部長）、加藤秀人（幹事）
欠席：伊藤輝代、池康嘉、清水徹、戸邊享、山口恵三、山田澄夫

報告事項

- 1 平成13年度（初年度）予算
内山支部長より平成13年度の予算が報告された。
- 2 本年度の既定の活動

1) 第84回関東支部総会(総会長:横浜市大 奥田研爾先生、平成13年11月26日~27日の2日間、神奈川県民ホール)、2) 第86回関東支部総会(平成15年秋)の総会長の選出、3) 支部ニュース発行(年2回発行)について内山支部長より報告された。

審議事項

1 4委員会について

内山支部長より今期の関東支部評議員会の各委員会の委員長が報告され、承認された。1) 合同学会委員会委員長、山口恵三、2) 編集委員会委員長、神谷 茂、3) 将来計画委員会委員長、小出幸夫、4) 学術集会委員会委員長、山田澄夫の各評議員。

2 支部の活動期間の変更について

現在は、関東支部の1年の活動期間は前年の10月1日から9月30日であるが、決算等の処理上1月1日から12月31日までとした方が、現状にあっていないのではないかと内山支部長から提案があった。今後評議員会において審議することになった。

3 学会合同学会の将来について

日本感染症学会東日本地方会と日本化学療法学会東日本支部会による2学会合同学会への参画(3学会合同学会)については、これまでの経過を整理して、討論を続けることとなった。

4 既定の3学会合同学会以外の合同学会の可能性について審議され、将来計画委員会を中心にして、考えることとなった。

5 関東支部会の第18回よこはま21世紀フォーラム(奥田研爾会長、後援:横浜市、横浜市大その他、平成13年11月28~29日)への協賛について審議され、協賛することが承認された。

〈受賞のお知らせ〉

本年4月2~4日に行われた第74回日本細菌学会総会において、関東支部会員の中から下記の受賞者がありましたので、お知らせいたします。受賞をお祝いいたしますとともに今後の更なるご発展を祈念いたします。

平成12年度黒屋奨学賞受賞

鈴木敏彦(東京大学医科学研究所)

「赤痢菌のアクチン重合に基づく細胞間感染機構の研究」

【編集後記】

春風や闘志抱きて丘に立つ(虚子)

季題を軽視した新傾向の俳風に対して伝統的なスタイルを守ろうとした虚子の闘志が窺われます。春風の中、大学や研究所などではフレッシュマンを迎え、闘志というものが自然に湧いてくるものと思われれます。微生物学の第一回目の講義にはほぼ全員の学生が集まり、教室には学生の闘志というものがみなぎる感がいたします。この闘志をいかに持続させるかが、教壇に立つ者の悩みでありかつ腕の見せ所でしょうか。新しい編集委員会による最初の支部ニュースが出来上がりました。“ゴミ箱に捨てられない支部ニュースを作る”ということを最大の目標に、闘志を抱いて編集作業を続けていきたいと思っております。フォーラムは従来通り学術的なトピックをタイムリーに取り上げることとしました。またBeyond the Laboratoryというエッセイ欄を新設いたしました。編集委員の考える企画には限界があらうかと存じます。現行の支部ニュースに対する批判、提言等会員の皆様方の忌憚ないご意見をお寄せ下さい。(S.K.)

日本細菌学会 関東支部ニュース 第37号

(2001. 5. 10)

発行: 日本細菌学会関東支部
〒162 東京都新宿区河田町8-1
-8666 東京女子医科大学

微生物学免疫学教室内

支部長 内山竹彦
編集 伊藤輝代、小原康治
神谷 茂(責任者)、
平井義一

Tel 03-3353-8111(内線22713)

Fax 03-5269-7411

E-mail: tuchi@research.twmu.ac.jp
